

俳句随想 〔三百三十一〕

汀子

平成二十一年も瞬く間に過ぎ去り、新しい年を迎えたことになる。俳誌を続けて行くと言うことがどんなに努力をしなければならぬかということとを身に沁みて感じた昨今である。インターネット、パソコン、などのツールが俳句の世界にも浸透して来た。それらを利用して上手に生きて行く。テレビに出て有名人名になった錯覚を持つ。それらは後ろで糸を引く仕掛け人があるのかないのか。ともかく、俳句を作ること、佳い俳句を鑑賞するということと、パソコンやインターネットを駆使することの間には何も本質的な関係はないようである。そこを錯覚してはならない。では、何が佳い俳句かというそれぞれ一人一人の作者の考えがあり、そこに踏み込んで行く選者もまたそれぞれの考え方を持っている。大切なのは自分の頭を鍛えることである。我々には揺るぎない信念がある。花鳥諷詠という俳句の理念がある。客観写生という作句の技がある。それと個々の感性を磨くことでものを見る詩人の心を昂揚させることが出来る。これからの俳句は若い世代に委ねて行かなければならないがこれらを踏襲してなお新しい花鳥諷詠を目指して欲しい。古壺新酒である。

旬日記 汀子

平成二十一年一月四日 関西野分会

犬の餌 狙ふ姿 勢や寒 鴉
距離感を失ひゆきぬ 初電話
初電話切れて距離感戻りけり
一月四日 下萌句会

去年今年とどめし刻を重ねけり
逃げてゆく時間を追うて去年今年
もの忘れうたかるたにも及びけり
庭芒初日とどめてをりしこと
揃ひたる家族のあとの初湯かな

一月五日 ロイヤル俳壇

寒に入る 朝の快晴頼みとし
三寒や耐ふる力のあることし
近づけて遠ざけて 初鏡かな
改る 心に 一句筆 はじめ
年賀述べたるより常の顔となる

一月六日 有恒俳句会

出掛けるに身支度しかと冴ゆる朝
風見えて雪に重さのなかりけり
足跡のなき雪道を怖れけり
インタビュより新春のはじまりし
一月七日 ロイヤル俳壇
七種を祝ひ快晴なる旅路

一月八日 清交社

計画は秘めて心に春隣
励まねば怠けごころの松の内
模様替 春待つ心あるとき
何となく過ぎたしまひし三ヶ日
予定書き入れ動き出す初暦
食積に家族の好みあることを

一月九日 工業倶楽部

風花の舞ふ東京と聞きて来し
凍道を侮る心なかりけり
忘れぬし初夢思ひ出し笑ひ
一月十日 芦屋ホトトギス会

山頂の雪雲降りて来さうな日
狙ふほど外れたる 的 投扇興
虚子没後 五十年てふ初暦
一月十三日 大阪倶楽部

避れ友よ寒灯明うせよ

雪折の音と分りしまでのこと
寒きことすなはち逢ひし誰彼に
初旅の切符手にしてより用意
寒さとして言うてをられずなりけり
雪折の一枝ならざる明るさよ

一月十三日 綿業倶楽部

誰よりも長き初湯となりにけり
寒月の彼の日忘るること勿れ
一月十七日 年尾を偲ぶ会

峠越えゆける明るさ春隣
冬芽抱く木々の明るさ九十九折

一月十八日 偲ぶ会二日目

峠とてもこの明るさは春隣
一月二十日 無名会

大寒の今日身ごしらへ心して
一泊といへど避寒の旅となる
幾曲り長き廊下や避寒宿
富士を見る避寒の旅となりけり
大寒といふこと忘れたる出先
模様替 庭に及びぬ春隣

一月二十一日 夏潮句会

春を待つ心に少し無駄遣ひ
待春の心ふくらみゆけるかな
はかりごと二三春待つ心添ふ
初旅の話も少し五六人
雨の降るまでの焚火となりしこと
雨降つて来たる焚火は捨て置かれ
一月二十二日 きつねの会

転んではならぬ凍道とて旅路
凍ててぬし部屋の鍵開け旅帰り
まづ部屋しの凍を解かん旅帰り
凍道を来し旅疲れとも思ふ
一月二十三日 時雨会

青空を取り戻すより春めきぬ
初暦たちまちめくる二十枚
寒の雨止めば季節の動きけり
一月二十四日 野分会

芝公園わが者顔に寒鴉
寒鴉目に表情のありにけり
きらはれてあるを承知の寒鴉
初電話いつもの如く切りにけり

廣太郎句帳

廣太郎

松とれて第百五回蕉心会

一月十七、十八日 年尾徳々会

初富士に空従つてをりにけり
縁結び祈るあなたに冬日濃し
寒灯下伝統を守る百二人
三寒に目覚め四温の旅へ又
凍星を期待して出る五六人

一月十八、十九日 年寿会

ここよりは寒さを捨てて行く旅路

平成二十一年一月八日 土筆会
初明り館の歳月語るかに
包丁の音に目覚めて齋粥
初明り星座散らしてゆきにけり
一輪に探梅 心動き初む

一月十四日 登高会

十五日粥主婦の座のある限り
日に研がれ星に育ちし軒水柱
軒水柱零下三十度の刃先
朝日とは水柱凶器にしてしまふ

一月十五日 蕉心会

小正月集ふ句友も句敵も
都鳥一羽は君の化身とも
寒紅はピンク勝負服は真紅

南伊豆てふ早梅の褥かな

早梅に太平洋の風荒し
早梅の日に応へたる白さかな
初御空 鴉 東へ 鳩 西へ
天帝の初東雲を払ひゆく
人寄せて羽音を寄せて梅早し

一月二十五日 一庵 七百号記念祝賀会

祝ぎの座へ全き初富士の車窓
一月二十六日 朝日カルチャー若草句会

春隣張り切り焦る点呼ちやん
春近き音色は点呼ちやんの笛
この日和明日大寒といふ不思議
昨夜の雨弾き水仙香りけり
待春の歩幅君との距離縮め
喝采を浴びオーバーの帰り来る

一月二十七日 若水句会

初明り虚子の威光を放ちけり
藪柑子 正客の席改る

一月二十八日 目黒学園句会

雪解風とはさらさらとさはさはと
待春の川対岸に色持たず
春隣心 変りは常の如

春を待つとは日に風に君の目に
初句会不在投句も縁かな
人のみにあらず春待つ水辺かな
詩心の一步となりし初句会

一月二十日 草木瓜会

雑詠

廣太郎 選

終戦の日の秘話として緋きぬ 鳥取 椋誠一朗
 語りつぐ終戦の日の日差しかな 同
 黙祷の子らに八月十五日 同
 もてなされたる星空と新豆腐 神戸 山田弘子
 夏霧の何も見えざることが景 同
 本復を励ましつづけいつか秋 同
 蜻蛉の空とは急に消えたりす 香川 湯川 雅
 落つる音流るる音へ落とし水 同
 待たされし時を区切りて一葉落つ 同
 夏川の一本を胸中に置く 熊本 岩岡中正
 青春のごとくに夏炬かき立てる 同
 切株にわれも露けくなりけり 同
 計画はあつてなきもの夏休 神戸 涌羅由美
 先鋒は末つ子なりし水鉄砲 同
 絵扇の風雷神より小さき風 同
 秋立つも地球時計の遅れかな 東京 橋本くに彦
 ビル高しまだまだ低き秋の空 同
 開け放つ水面待ちある渡り鳥 同

空港の虹に到着便を待つ 同 大久保白村
 滝壺の水とは打たれ強きもの 同
 露涼し煉瓦の館は開拓史 同
 閻王の二つの眼二つの灯 柏 田丸千種
 迎鐘この世混雑してをりぬ 同
 襖絵の竜地に伏せる極暑かな 同
 雲の峰抜け雲ひとつなき航路 龍ヶ崎 今橋眞理子
 プライベートビーチへ降りる星月夜 同
 吸ひ込まれさうな銀漢仰ぐ島 同
 吹き抜けてゆく飛火野の風みどり 京都 安原 葉
 青丹よし奈良吹きわたる風みどり 同
 詩の話題利殖の話題明易し 同
 虫の闇その先にある海の闇 熱海 嶋田一步
 近づいて来ては遠のき虫時雨 同
 その中の間を置きし音は鉦叩 同
 花火待つ舟船の灯のじつとして 同 嶋田摩耶子
 吾の窓に居るかぎり吾の梅雨の月 同
 棚その他無事で地震止み灯の涼し 同
 延々と肅々とあり蟻の道 福山 竹下陶子
 滴りのメトロノームを打つてをり 同
 虹の立ち花鳥諷詠詩を描く 同
 辿り来て露風旧居の蟬しぐれ たつの 浅井青陽子
 新涼の風の届かぬ山門に 同
 夕暮れて啼きたつ蟬の多いこと 同

雑詠句評（十二月号より）

露けしやその名ふたたび聞くにつけ 龍ヶ崎 今橋真理子

作者にとつて、偲ぶ故人は少なくないでしょうが、この句からは、どうしても彼女のみちのくの友人の面影が重なる。

共通の友人なり知人なりの口から、思いがけずその人の名前を聞かされたとき、早世された友ゆえに、ただ懐かしいだけでなく、優く哀れに思われた。

しげ人・雅　・純也
くに彦・弘　子・昭代
比奈夫・仁　義・暮潮
一　歩・廣太郎

「露けしや」の言葉に、精一杯友を偲ぶ優しい心情が溢れている。（雅）

親しかった人が、もうこの世には居ない。何かの機会にその故人の名前を耳にした作者なのである。悲しみの中にも、その人の楽しかった思い出が浮かんできたのではないだろうか。人との出会いがあれば、必ず別れがある。そんな心情が季題を通してしみじみと語られている。（廣太郎）

芝に寝て三瓶の鼓動とは涼し 福山 竹下陶子

芝生に寝ころがって、三瓶山を仰いでいると、その靈気が鼓動のように伝わって来るといふのであろう。気持ちのいい句であるが、「とは」が何としても、説明臭いように思われる。（純也）

三瓶山の中腹あたりになるだろうか。昔練兵場であったという広い草原がある。そこを想像するが、その草の上に大の字に寝ている作者であろうか。山岳というのは、信仰の対象になったり、どこか神々しい印象があるが、その活き活きとした鼓動を聞いている姿が季感豊かに語られている。（廣太郎）（以下略）

美しく老いたき願ひ更衣 たつの 浅井青陽子

生きている限り訪れて来る老い。それと同時に湧き起こる「美しく老いたき」という願い。季節の移ろいに立ち会った時に、人はその願いを強くし思いを深くする。

今、目の前に来ている明るく力強い夏。更衣をして夏を迎える自分。そこには、前述した願いと同時に「更衣」を通して心身の若々しさを呼び起こしている作者自身が描かれている。

季題の効果が大きい一句である。（しげ人）

御歳の事を申し上げるのは失礼であるが、作者はこの句を御投句の時点で、満百歳を迎えられた。しかも未だ現役バリバリの実業家として日夜仕事に励んでおられるのである。作者のこの願いは、むしろ実現していて、筆者を含め読者に向けられたメッセージともとれる。素晴らしい人生である。（廣太郎）

天地有情

花子選

願ひごとむかしは多し星まつり 熱海 嶋田一步
病癒ゆことだけ願ひ星まつり 同
梅雨霧を纏ふより山陰となる 東京 稲畑廣太郎
風蘭の風と存問する高さ 同
泉あり使徒のごとくに集ひけり 熊本 岩岡中正
句作とは祈りのかたちほととぎす 同
木の実独楽にも廻り澄むことのあり 榎原 稲岡 長
おほばこの相撲に鼻の油ちよと 同
落し文拾へば雨をこぼしけり 神戸 山田弘子
忘却といふ救ひあり天の川 同
月出でて荒くなりたる葉月潮 同 三村純也
やや荒るることも慣ひの葉月潮 同
秋の夜のきざはし軋む奈良ホテル 同 長山あや
乾坤に芒の声の満ち来たり 同
津軽富士茜に約す星月夜 東京 河野美奇
旅し来しみちのくも奥星月夜 同
盆の十六日蓮のよき蕾 神戸 後藤比奈夫
底紅に忌日重ぬることもなし 同

風立ちて夏あつさりと過ぎゆける 東京 今井千鶴子
仮住の夜々育ちゆく盆の月 同
句朗読六十年の虚子おぼろ 福山 竹下陶子
健康な故の朝寝をたのしめる 同
虚子の記の語るホテルや露涼し 京都 安原 葉
邂逅の友を待つ宿明易き 同
はん女また偲びてをりぬ阿波踊 たつの 浅井青陽子
露風の地たづねし人に残暑なほ 同
うつろひの日日を語るや風晩夏 吹田 宮崎 正
競ひたる姉の手火花まだ消えず 同
しづこころには水馬集ひくる 徳島 上崎暮潮
原始とはかく襲ひくる山の霧 同
新涼や星にささやく葉擦れ音 東京 笹倉 潤
解熱にと病臥の妻に冬瓜来る 同
神木を仰ぎし空の秋深む 高松 永森とみ子
背山より風に流され法師蟬 同
金柑の花時に多雨如何にせん 福岡 松尾緑富
金柑の多雨に乏しき結実を 同

天地有情句評

汀子

おほばこの相撲に鼻の油ちよと 樋原 稲岡 長

蚊帳吊草で相撲をとることく車前草で競う時のまじない。

落し文拾へば雨をこぼしけり 神戸 山田弘子

落し文がこぼした雨に現実との接点。

やや荒るることも慣ひの葉月潮 神戸 三村純也

干満の差がはげしい大潮の荒れは承知している。

秋の夜のきざはし軋む奈良ホテル 神戸 長山あや

奈良ホテルの旧館の軋む階段を懐かしいと感じた作者。

津軽富士茜に約す星月夜 東京 河野美奇

津軽富士の稜線がくつきり茜に浮き上がる晴に星月夜への期待

願ひごとむかしは多し星まつり 熱海 嶋田一步

殆ど願いは叶えられた人生の最後の願い。

梅雨霧を纏ふより山陰となる 東京 稲畑廣太郎

山陰の梅雨の深さを覚悟して来た旅路。

句作とは祈りのかたちほととぎす 熊本 岩岡中正

敬虔な心で自然をじっと見る姿勢。